

WISC-Vからわかる子ども達の心の世界と葛藤

現在社会を主体的に生きるために

木谷 秀勝^{*1}・櫻井 凜^{*2}

Inner World and Conflict of Children though WISC-V: significance of individuality
at modern society

KIYA Hidekatsu^{*1}, SAKURAI Rin^{*2}

(Received JULY 31, 2024)

キーワード：WISC-V知能検査、主体性、子ども達の葛藤

はじめに

2021年にWISC-V（児童用ウェクスラー式知能検査 第5版）が発行された。それまでのWISC-IVと比較すると、従来からの知能検査の枠組みから離れて、今回の副題に示したように、複雑な現代社会を生き抜く子ども達にとって重要な指針となる「主体性」が強調されている。同時に、その主体性を持って生きるために必要な豊かな心の世界とは何か、そこで生じる心の葛藤の世界をどう理解し、どのように対処するかを推し量るツールとしてWISC-Vの役割の重要性が増してきていると筆者自身は感じている。

そこで、本論文では、改めて「知能とは何か」を再検討しながら、WISC-Vをどのように臨床的に活用することが、子ども達にとって最適になるかについて検討することを目的とする。

1. 知能とは

知能 (Intelligence) は、「情報の獲得や経験からの学習、環境への適応、理解、あるいは思考や推論の適正な利用を可能にする能力」と定義されている (APA, 2013)。この定義で重要なことは、単に情報（あるいは知識など）を獲得するだけでなく、変化する環境に合わせて「適正な利用」することである。この点は後述するように、学習指導要領で示す、子ども達の「生きる力」を育むための「知識の活用」にも通じている。

ところで、この「適正な利用」を必要とする知能は、人間にとって、どのように獲得されてきたのだろうか。実は、この点を再検討することが、WISC-Vをより深く理解することにつながるようになってきた。そして、そのヒントとして、近年の「人類学の新たな展開」(篠田, 2020)が参考になる。

Raichlen & Alexander (2020) は、「運動が記憶力を改善する理由」として、類人猿から人類が進化する過程で、「体を動かす生活様式への移行」に伴い「頭を使う運動が認知機能を発達させる」考え方を証明してきた。具体的には、「食物を調達するために遠方に出かけるときには、周囲を見渡して自分たちがいる位置を確認しなければならない」、「自分たちが以前いた場所や、ある種の食物がいつ入手できたかを覚えておかなければならない」、「体のバランスを保ち環境中で自分の空間的位置を把握しながら、会話することになる」などの事例を通して、二足歩行（集団での狩猟採集を可能にする）により、海馬（長期記憶、空間ナビゲーション）や前頭前皮質（マルチタスク）の認知機能の神経可塑性（いわゆる学習）がより進化したことを明確にした。

さらに、人類学だけでなく、古代史研究を通して、人類がより社会化した歴史が解明されてきた。その具体的な成果として、人類がより集団での行動を必要とした、縄文時代から弥生時代への歴史的な分岐点の研

*1 山口大学名誉教授 *2 山口大学学生特別支援室

究成果である。この弥生時代について、石川（2010）は「日本列島という生態環境がもたらす豊富な資源を巧みに利用しながら持続的な社会を構成（資源的制約を超えれば生存が危うくなる）していた時代から、人類が自らを組織化（農耕を採用して資源の拡大を行ない、自らも変革）することで急速に社会変化する時代の転換であった」と述べている。つまり、弥生時代の到来とともに、人類は社会的ネットワークを拡大（クニ作り）し、文化的革新（イノベーションや創造性）を通して、より「人間らしさ」である文化を継承するようになったと考えている。文化（Culture）の語源が“Cultivate”（耕す）であり、社会（Society）の語源が“Socius”（仲間）であるように、人類が農耕文化を通して、より発展して、現在社会の基礎を構築したことがわかる。

このように人類の長い歴史を通して、知能は「適正な利用」を可能にするように変遷してきたことがわかる。しかしながら、これまで見てきたように、人類の進化の過程では、狩猟採集から農耕へ、さらに複雑な現在社会により適合できるように、柔軟性のある環境への適応能力が重要であったことは確かである。この点に関して、丸山（2013）はアフォーダンス心理学の視点から、知能について「身体と環境の動的な交差が変化を生む。それは、より高次元な認知的能力が現れる基盤である」と指摘し、さらに「そうした営為を持続させることができる私たちは、確かに『今、ここ』に、『これまで』の履歴と『これから』の時間を内包しながら動き、発達している」と、知能は、単に過去を整理して、今を生きるだけでなく、自己イノベーションを含めた未来を志向するための重要な役割を担っていることが理解できる。

以上のことからわかるように、現在社会を生きるわれわれにとっての「知能」は、人類の長い歴史の過程で培われ、複雑で絶えず変化する環境に柔軟に適合しながら、未来に向かい、主体的に自らを変革しようとするために獲得した「生き抜くための脳機能」と理解することが適切である。

2. 現在社会を生きる子ども達に求められる能力

前章では、「知能」は「生き抜くための脳機能」として説明してきた。この点に関して、現在社会を生きる子ども達が、実際に学んでいる教育の基盤となっている考え方を通して、さらに理解を深めたい。

2-1 「OECD Education 2030」プロジェクト

OECD（経済協力開発機構）では、「教育政策委員会」と「教育研究革新センター」の2つの機関を設置して、加盟国の教育に関する分析・研究を行っている。「OECD Education 2030」プロジェクトは、2015年から始まり、「2030年という近未来において子ども達に求められるコンピテンシーを検討するとともに、そうしたコンピテンシーの育成につながるカリキュラムや教授法、学習評価について検討」するプロジェクトである（白井，2020）。そこでは、OECD教育スキル局局长であるアンドレアス・シュライヒャーが次のように述べている。

「昨今の教育は、子どもたちに『何かを教える』ということにとどまるものではない。一人一人の生徒が、信頼できる『コンパス（羅針盤）』を持ち、より変わりやすく不確実、複雑で曖昧となる世界においても、自信をもって、自らを導いていくことができるよう手助けするものになってきている」（筆者抜粋）。ここで示される「より変わりやすく不確実、複雑で曖昧となる世界」は、“VUCA”と呼ばれている（図1）。

この“VUCA”が示すように、これからを生きる子ども達にとっての近未来では、「自らを導いている」能力を学ぶことが重要であることは容易に理解できる。

<p>Volatile (変化のしやすさ): 変化のスピードや範囲が、常に加速していること</p> <p>Uncertain (不確実さ): 将来何が起きるかを予測することが難しいこと</p> <p>Complex (複雑さ): 様々な事象が、相互に絡み合い、多要因によって生じるため、解決策を見つけることが難しくなること</p> <p>Ambiguous (曖昧さ): 物事の意味や帰結が曖昧で、明快な意思決定が難しくなること</p>
--

図1 “VUCA”とは

2-2 生徒指導提要

2022年に文部科学省が改訂した「生徒指導提要」では、生徒指導の目的として、「児童生徒一人一人の個性の発見とよさや可能性の伸長と社会的資質・能力の発達を支えると同時に、自己の幸福追求と社会に受け入れられる自己実現を支えること」と定めて、その目的の達成のためには「児童生徒が、深い自己理解に基づき、『何をしたいか』、『何をすべきか』、主体的に問題や課題を発見し、自己の目標を選択・設定し

て、この目標の達成のため、自発的、自律的、かつ、他者の主体性を尊重しながら、自らの行動を決断し、実行する力、すなわち、『自己指導能力』を獲得することが重要であることを指摘している（文部科学省、2022）。

同時に、知能検査に関する記述として、第13章「多様な背景を持つ児童生徒への生徒指導」、第1節「発達障害に関する理解と対応」、第5項「関係機関との連携」において、「児童生徒の発達上の課題を想定するために、関係機関と連携し、検査による評価を行なうこともあります^{〔*135〕}。」（原文のまま）と示すと同時に、脚注に「〔*135〕例えば、知的発達の水準や認知特性をみるにはWISC-IVやWISC-V、認知能力と習熟度の差をみるにはKABC-II、適応行動の発達水準を幅広く捉えるにはVineland-IIが活用されます。」と初めて、知能検査などの心理アセスメントを具体的に明示した。

2-3 ウェクスラーが考える「知能」とは

ウェクスラー（Wechsler, D.）は、今回紹介するWISC-Vなど、ウェクスラー式知能検査を考案した人物である。そのウェクスラー自身は、「知能」に関して、1944年の段階で次のように定義している。「目的的に行動し、合理的に思考し、能率的に環境を処理する個人の総合的・全体的能力」。さらに、1973年には知能を測定する「知能検査」について「知能検査が測定するものは、自分の周囲の世界を理解し、世界が投げかける難題に対処する自分の高い処理能力を理解する個人の能力である」と指摘した（日本版WISC-V刊行委員会、2021）。

こうしたウェクスラーの指摘からわかるように、先に紹介した「OECD Education 2030」プロジェクトや生徒指導提要で指摘した子ども達が将来にわたり豊かな生活を過ごすために必要な教育に係る基本的な視点は、既にウェクスラー自身が指摘したものと同一と考えることができる。

したがって、今回のWISC-Vをより臨床的に活用することは、そのまま現在社会を生きる子ども達にとって、豊かな未来に向かって主体的に生き抜く力を育てることが可能になると考えている。

3. WISC-Vがもつ可能性

3-1 WISC-Vの基本的な特徴

WISC-IVからWISC-Vに移行するにあたり、WISC-Vの基本的な特徴は表1のとおりである。

表1 WISC-Vの基本的な特徴

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・脳に関する最新の科学的知識やIQが必要とされる状況を反映している・問題解決を理解する（前頭領域のネットワーク）とするなら流動性推理は単一の構成概念として、認知プロフィールの舵となる・成長を神経可塑性として、この可塑性を学習（教育的成果）と呼ぶ・臨床家の要求に応えられるように知能の概念を脱構築する過程にいる・今後は、デジタル版が入手可能になる |
|--|

表1で示した項目を整理すると、特に次の3点がWISC-Vを活用するために重要な視点になることがわかる。第1に、脳科学に関する最新の科学的知識（もちろん、米国版が発行された時点にはなるが）が、5つの主要指標の理解に反映されていることである。その一部を表2に示す。その影響も受けて、WISC-Vでは、「成長を神経可塑性」として捉えるようになり、脳機能がより有効に活用され、学習効果が継続的に見られる状態になって初めて、子ども達が成長したと判断できるようになっている。

第2に、WISC-IVでの「知覚推理」が、WISC-Vでは「視空間」と「流動性推理」の2つの主要指標に分かれたことである。この問題は既にWISC-IVの時から議論されてきたが、WISC-Vになり、「流動性推理」の重要性が強調されるようになっている。第3に、IQ（知能指数）の算出方法と合わせて、「知能の概念を脱構

築」する意図がより明確になり、従来の IQ とみなす FSIQ の算出方法が大幅に変更された。具体的には、WISC-IV では 4 つの合成得点の実施がそのまま FSIQ の結果に反映されていたが、WISC-V では、5 つの主要指標（計 10 検査項目）から 1～2 項目が反映されるようになり、最終的に計 7 項目で FSIQ の算出が可能になっている。ただし、検査マニュアルには「解釈にあたっては 10 の主要下位検査の実施を推奨する」と書かれており、WISC-III までの IQ 重視の視点から、より実際の支援を明確にする方向に舵が切られたことがわかる。この点に関しては、5 つの補助指標が採用されたことにも関連している（今回、補助指標については省略する）。

表 2 5 つの合成得点指標に関連する脳科学の知見

合成得点指標	脳科学の知見
言語理解	基本的言語スキルと複雑な問題解決/推理の相互作用 言語の発達には、脳の機能の特殊化（則性化）が重要 推理は前頭葉のネットワークと関連
視空間処理	右半球の方が、視覚・空間関係の処理との関連性が高い 空間推理課題は、両側前頭葉や右頭頂葉の活動が関連
流動性推理	脳の複数の領域が活性化する、基底核が関与 前頭頂抑制ネットワーク：認知のモニタリング
ワーキングメモリー	前頭葉領域の活性化が一貫して見られる 児童期及び青年期における前頭－頭頂経路の発達と関連 前頭前野皮質-基底核ループが情報のフィルタリング
処理速度	迅速かつ効率的な情報の処理 刺激に迅速に反応し、効率的な処理を要する脳のリソースを最小限にする

3-2 5 つの主要指標がもつ臨床的な意味

先に示したように、WISC-V からは 5 つの合成得点が算出できるようになる。

それぞれの主要指標について、WISC-V マニュアルに示されていたそれぞれの能力と WISC-IV との違いを表 3 の中央に、筆者が試行的に整理したそれぞれの臨床的な意味を表 3 の右側に示した。そこからわかる重要なポイントが 2 つある。

第 1 に、「応用する能力」がより重視されている点である。「言語理解」、「流動性推理」に示されたように、成長に合わせて獲得した知識や概念をより環境（人的・物理的）に最適になるように主体的に取り組もうとする行動が評価されている。

第 2 に、ワーキングメモリーでの「視覚と聴覚」の両方の感覚が重視されている点である。WISC-IV では、視覚的側面だけが強調されてきた経緯もあり、大きな改善点だと言える。

表 3 5 つの主要指標の臨床的な意味

主要指標	WISC-V マニュアル（P 129～） カッコ内は、WISC-IV との比較	臨床的な意味
言語理解指標	子どもが獲得する言葉の知識にアクセスし応用する能力（単語の知識を用いた推理を強調）	「困った時に、相手にわかるように質問ができるか」：援助要請スキル
視空間指標	視覚の詳細を評価し、視空間関係を理解する能力（視覚・知覚推理および視空間推理を強調）	「安心・安全な空間・距離間を保ち続けることができるか」：心的距離スキル
流動性推理指標	視覚対象間の根底になる概念的関係を検出し、推理を用いてルールを特定し応用する能力（抽象的な概念推理を強調）	「周囲の状況を見渡しながら、安全に行動することができるか」：危機回避スキル
ワーキングメモリー指標	視覚や聴覚の情報を意識的に登録し、保持し、操作する能力（視覚的ワーキングメモリーの強調）	「学習・仕事の優先順位を考えながら処理することができるか」：予測・計画的処理スキル
処理速度指標	子どもの視覚的判断、意思決定、決定実行の速度と正確さ（WISC-IV と類似）	「疲れず、効率よく課題が終わるよう自己決定ができるか」：協調運動スキル

3-3 5つの主要指標の相互関係

主要指標が5つになったこともあり、それまでのWISC-IVに慣れていた検査者からは、解釈が難しくなったという声も聞いている。実際はどうだろうか。

筆者自身は、後の事例でも紹介するように、日々の日常生活をより安定して過ごす基盤になるのが、「ワーキングメモリー」・「処理速度」として考えている。こうした「基底生活行動」（笠井，2021）が安定して初めて、「言語理解」・「視空間」・「流動性推理」が必要とする「学校や集団行動などの環境で社会適応スキル」がより安定すると考えている。つまり、前者が日常生活に必要な学習の基盤となり、後者がその応用と考えている。

逆に言えば、日常生活自体に「基本的な生活リズムの不安定さ（ワーキングメモリーの不全状態）」と「日常生活での心身の疲れ（処理速度の不全状態）」が顕著になり、その結果として、基底生活行動の維持が難しくなる。こうした日常生活全般の不全状況が長期間改善されない場合には、学校や集団行動などの環境の変化に対する柔軟性も低下することは必然であり、何らかの不応行動が生じることは確かである。

以上のように、5つの主要指標の相互関係を理解することが、そのまま支援につながることは確かである。ただし、より詳細な相互関係については、現在進行形で検討を進めており、その成果は後日報告したい。

4. 事例提示

WISC-Vの臨床的な活用のために、実際にどのように検査結果を理解・解釈して、実際の支援に活用できるかについて、今回は1事例を提示する。なお、事例提示にあたり、被験児及び家族に関する個人情報保護のため、事実関係の一部を修正している点をご了解いただきたい。

4-1 事例の概要

事例Aは、小学低学年の時に、多動や不注意、同時に授業中に立ち歩くなどの行動が続き、両親も対応を悩んでいたこともあり、養護教諭から相談依頼があり、来談に至る。その後は、家庭と小学校の連携も進み、医療機関で勧められた服薬の効果もあり、学年が進むにつれて、当初の行動はほぼなくなり、友人関係でも積極的になってくる。それでも、不注意は続くこともあり、小学6年生になり、中学校での支援の方向性を検討する目的から、共同執筆者の櫻井凜が検査を実施した。

4-2 検査結果について

検査結果については、櫻井が草稿を作成し、その後木谷が加筆修正したうえで、以下に示す内容を中心に報告書に整理し、保護者にも内容を確認してもらった後、小学校にも提出し、中学校での支援に活用してもらうように依頼した。

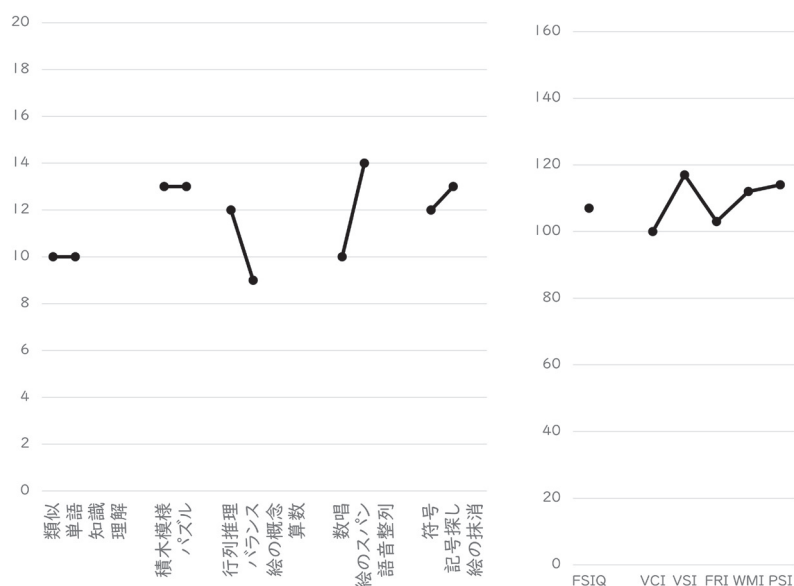


図2 WISC-Vのプロフィール

その報告書の内容は、以下のとおりである。なお、報告書では語尾を「です・ます調」にしているが、本論文では、語尾は変換している。

◇言語理解

前回（小学4年生）と比較しても、言語表現全体では伸びてきていることがわかる。したがって、現在の学校環境では友達との会話などでは大きな問題はないと考えられる。それでも、慣れない環境や大人との会話、さらに課題に過集中している場合には、困っていることや心身の疲れなどを伝えることが難しいことが考えられる。

◇視空間

刺激の少ない教室環境（検査室と同じような）では、リラックスできて、他者と安定した距離感を維持しながら過ごすことは可能である。ただし、視覚刺激に敏感（過集中の傾向）であることから、疲れやすい傾向は今後も継続する。

◇流動性推理

直感で答えることが多く、複雑な思考が必要とされる問題には「めんどくさい」とする傾向がある。それでも、視覚情報でのヒントがあれば、課題への関心は維持できて、間違いにも気づくことができるようになっていたので、以前のようなパニックは減っていることがわかる。

◇ワーキングメモリー

視覚情報からの短期記憶は残りやすいが、聴覚情報からの短期記憶では、6桁の数字の復唱や逆唱で混乱している。口頭での言語指示を聞き、順序立てて課題を進めることは、集団指示が増える中学生では難しくなると予想される。

◇処理速度

検査場面のような安定した環境であれば、自分のペースを保ちながら効率的に解答することができる。しかし、周囲からの刺激が多い環境では、気が散ってしまい、自分のペースを保つことが難しくなると推測される。

◆全体として

検査中の様子として、注意の継続が難しい。そわそわしていて、下を向いていることも多く、答える速度が速く、直感で答える傾向がある。それでも、以前よりは、一度間違えても気づくこと（振り返り）ができるようになってきている。

前回の結果と比較しても、「言語理解」と「処理速度」が伸びていることもあり、コミュニケーションや学習内容の定着、さらに板書によるノート整理は安定していると推測できる。その点からも、小学校での継続的な支援の成果が確実に現れていると考えているので、現在の配慮と同じように、中学校でも引き続き配慮をお願いしたい。

4-3 5つの主要指標の相互関係

報告書では、以上のとおり、小学校での支援の成果と中学校で予想される支援の方向性を中心に整理した。そこで、この節では、3-3で示した5つの主要指標の相互関係について整理する。

図2では、小学4年生の時のWISC-Vの結果は示さなかったが、前回と今回の結果を比較すると、5つの主要指標の得点の差異が小さくなり、外界からのさまざまな刺激に対する反応が全体的に安定した方向になったことがわかる。同時に、「ワーキングメモリー」と「処理速度」との差異がなくなり、基底生活行動としての日常生活での安定感が出てきたこともわかる。こうした日常生活での安定感により、学校生活全般で心身の健康さを維持できるようになり、学習上の課題が残っているとしても、安心・安全な学校生活を過ごすことができるようになったと考えられる。しかも、こうした安定感があれば、事例Aの特性である「視空間」の高さは、低学年の時には過敏性の高さとして不安定要因となっていたが、6年生では、周囲をよく観察しながら下の学年の児童に気を配ることができる高学年らしい行動につながってきたこともわかる。

こうした5つの主要指標の相互関係を明確にすることにより、事例Aの成長だけでなく、両親の長年にわたり理解と支援の成果、学校生活を主体的に過ごしている心理的背景についても理解を深めることが可能になる。

5. 現在社会を主体的に生きるために

事例を通して、また前半で紹介した「OECD Education 2030」プロジェクトや生徒指導提要からわかるように、現代社会を生きる子ども達の苦悩は測りきれないくらいの様相にある。それだけに、子ども達の心の世界とそこに生じる葛藤への深い理解を、われわれ大人側が早急に取り組みなければならない時代を迎えている。その理解を進めるための大切な検査ツールの一つが WISC-V だと筆者は考えている。

その理解を進めるための基本的視点を、WISC-V の 5 つの主要指標に重なる形で示したい。

5-1 言語理解：助け・助け合える援助要請スキル

既に説明したように、言語理解で重要なことは、たくさんの知識を獲得することではなく、その獲得した知識を状況や相手に合わせて、伝えあうことになる。しかも、“VUCA” な時代を、たった一人だけで「生き抜く」ことは至難の業以上の困難を要する。それだけに、本当に言葉を有効に伝えあうことが必要な事態は、自分が本当に困った時だと考えている。実際に、多くの子ども達、特に発達障害を抱える当事者の多くが苦悩していることが、困った時に誰に助けを求めたらいいか、あるいはどう表現すればわかってもらえるかに苦労している。

したがって、WISC-V の結果からも、ヘルプを出すことの苦手さ（表現力）なのか、相手からの返答の意図が読めないことで困っているのか、などを理解することが重要である。

5-2 視空間：安心・安全な距離を維持できるパートナー

集団活動では、その集団の中に入っているから「もう大丈夫」では言えない。多くの子ども達、特に筆者らが臨床実践している自閉スペクトラム症の女の子・女性の場合、集団に合わせようと過剰適応してしまう結果、自分自身を見失ってしまう傾向が強い（川上・木谷，2022）。また、近年顕著になっている社交不安を抱える思春期の子ども達を見ていると、他者と近すぎるか、距離を取り過ぎるかが極端になる傾向が強い。

したがって、WISC-V の結果からも、周囲の動きに敏感過ぎる傾向（個人内の相対的な評価が高い場合に多い）と周囲の動きに鈍感でかえって動けない傾向（個人内の相対的な評価が低い場合に多い）かをしっかりと見極めることが重要である。

5-3 流動性推理：「てんでんこ」を判断する回避スキル

最初に紹介したように、流動性推理は、5 つの主要指標の中でもっとも重要であることは確かである。しかしながら、流動性推理に必要な主体的問題解決能力を考える場合、どうしても「頑張る、この事態を乗り越えないといけない」と強迫的になりやすく、同時に「頑張ることが美德」とする傾向がわが国では依然として強い。特に教育現場ではしばしば「〇〇目指して、頑張ろう！」がキャッチフレーズになり、その雰囲気苦手な子ども達は自分を出せなくなり、結果的に（多数派から見ての）不適応と見られてしまうことが多い。今後の“VUCA” な時代では、一時的に「回避する」選択も重要になってくる。昔からあるように「逃げるが勝ち」の考え方を、子ども達が早期から体得して、状況判断を落ち着いてできるように一旦デフォルト状態に戻ることが、無理をし過ぎた結果生じる抑うつ状態を予防することにもつながってくる（小谷，2019）。「てんでんこ」は、東日本大震災の際に周囲に合わせるのではなく、自分自身で判断して、避難することが生き延びるための重要な昔からの教えとして、長年にわたり伝えられてきた「回避する」スキルである。

したがって、WISC-V の結果からも、敏感や不安が高いために、かえって周囲の動きに影響されやすい傾向か、問題解決能力が低いために、自分自身で判断できない混乱状態のまま、失敗するかもしれないと感じている、動いてしまう傾向なのかをしっかりと見極めることが重要である。

5-4 ワーキングメモリー：自分もつ時間感覚の主人公になる

最近の子ども達を見ていると、朝早くからの集団登校（一部地域かもしれないが）から始まる長い学校での時間、放課後はたくさんの習い事や中学校では部活や学習塾、そして遅い就寝時間など、本当に「時間に追われている」様相が強い。その結果として、ストレスからゲームに没頭する、あるいは朝起きられなくなるなど悪循環に陥ってから、相談に来る場合が多い。阿比留（2022）は子ども達の居場所だけでなく、一人

ひとりの時間感覚も失われつつある現在社会の問題点について言及した上で、子ども達が自分らしさ（主体性）を取り戻すためにも「自分をもつ時間感覚の主人公になる」重要性を指摘した。実際に、発達障害の場合、自閉スペクトラム症ではこだわりや強迫行動のために、ADHD では衝動的あるいは無計画さのために、発達性協調運動障害では不器用さによりすべての行動に時間がかかってしまうために、「時間に追われる」だけでなく、周囲から叱られることも増えて、結果として、心身の疲れが強くなり、問題となる症状がより顕著になることが多い。

したがって、WISC-Vの結果からも、周囲からの評価が視覚的・聴覚的に記憶されやすく、周囲に合わせてしまうあまり休憩することができない傾向か、周囲が見えずに、衝動的・無計画的に行動して、リスク回避ができない傾向なのかをしっかりと見極めることが重要である。

5-5 処理速度：疲れを感じる健康な身体

不器用さに関連する処理速度では、2分間という短い時間の中で、子ども達が色々な姿を見せてくれる。特に興味深いことが、終わった時の表情である。情緒的に安定している子ども達の場合、リズムカルの課題を行い、「最後までやれた」という実感と安堵した表情になっている。一方で、書字障害や発達性協調運動障害のように不器用さが強い場合、書き写すという行為だけで精一杯になりやすく、ミスに気づくことも少なく、疲れた表情になることもある。検査者は、この2分間での違いが、一日続くとうなるだろうと考えたことがあるだろうか。しかも、時間に追われる毎日の中で、自分を振り返る時間すらなくなりやすい発達障害では、周囲が予想する以上に心身の疲労度が高くなりやすい。その結果、睡眠の不安定さや朝起きられない、あるいは学校に行きたくない様相を呈することになる。

したがって、WISC-Vの結果からも、処理速度は高いが、言語理解が相対的に低い場合のように、簡単だと感じると素早く対処できるが、その対処法を次回に活かさない傾向か、処理速度が低く、視空間も相対的に低い場合のように、不器用さが顕著で、焦れば焦るほどにミスを多くなり、心身の疲労だけでなく、自信の低下も招きやすい傾向なのかをしっかりと見極めることが重要になる。

今後の課題

今回の報告は、令和5年度に山口県や九州各県で実施したWISC-Vに関連した研修会において報告した内容を再構成している。そのために、現時点（令和6年7月段階）では、さらに多くの検査実践やSVなどから体得した新たな発見があることは確かである。

今回は、特に、WISC-Vの基本的構造と現代社会を生きる子ども達の心の世界に焦点化しており、WISC-Vが持つさまざまな可能性だけでなく、その限界に関しては、次回以降に考察する予定である。

謝辞

本論文作成にあたり、日頃よりWISC-Vの研究会に参加し、事例提供だけでなく、さまざまな可能性について議論を重ねてきた研究会メンバーの先生方に厚く感謝申し上げます。

文献

阿比留久美（2022）：子どものための居場所論－異なることが豊かになる．かもがわ出版．

American Psychological Association（2013）：APA心理学大辞典．培風館．

石川日出志（2010）：シリーズ日本古代史①：農耕社会の成立．岩波新書．

笠井清登（2021）：思春期の脳とこころ（第38回日本小児心身医学会学術集会講演記録：特別講演3）、子の心とからだ、29（4）、374-377．

川上ちひろ・木谷秀勝編著（2022）：続・発達障害のある女の子・女性の支援－自分らしさとカモフラージュの狭間を生きる、金子書房．

木谷秀勝．（2021）．余暇活動が育む「こころ」と「からだ」のバランス感覚．加藤浩平編著．発達障害のある子ども・若者の余暇活動支援、26-33．金子書房．

- 小谷泰則 (2019) : 心とからだ 「予測」を調べると心と体の関係が見えてくるー予測からみた心と体の相互作用. 心理学ワールド, 84, 5-8.
- 丸山慎 (2013) : 発達ー身体と環境の動的交差として. 佐々木正人編『知の生態学的転回 第1巻身体ー環境とのエンカウンター』. 37-68. 東京大学出版会
- 文部科学省 (2022) : 生徒指導提要. www.mext.go.jp/content/20230220-mxt_jidou01-000024699-201-1.pdf. (最終閲覧: 令和6年7月30日)
- 日本版 WISC-V 刊行委員会 (2021) : WISC-V 理論・解釈マニュアル. 日本文化科学社.
- Raichlen & Alexander (2020) : 運動が記憶力を改善する理由. 別冊日経サイエンス: 人間らしさの起源ー社会性、知性、技術の進化史. 116-121. 日経サイエンス社.
- 七田忠昭 (2017) : シリーズ「遺跡を学ぶ」115 邪馬台国時代のクニの都 吉野ヶ里遺跡. 新泉社.
- 篠田謙一編 (2020) : 別冊日経サイエンス: 人間らしさの起源ー社会性、知性、技術の進化史. 日経サイエンス社.
- 白井俊 (2020) : OECD Education 2030 プロジェクトが描く教育の未来ーエージェンシー、資質・能力とカリキュラム. ミネルヴァ書房.